福島県民俗学会 News Letter

ふぉーらむ・F 7

Feb. 2018
福島県民俗学会

http://fukushimafolklore.jimdo.com/
fukushima_folklore1971@yahoo.co.jp

研究会報告　平成 29 年度東北地方民俗学合同研究会「民俗資料の『発見』と新たな『活用』の可能性を探る」

平成 29 年度（第 34 回）の東北地方民俗学合同研究会は、「民俗資料の「発見」と新たな「活用」の可能性を探る」というテーマのもと 11 月 25 日に青森県弘前市の弘前大学で開催された。当日は以下の 6 本の発表と総合討議が行われた。

①増田公寧氏 (青森県民俗の会)「**家電をテーマにした企画展示**」
②鎌田幸男氏 (秋田県民俗学会)「**民俗資料の新たな活用可能性を探る―ナマハゲ伝道師認定試験を例に―**」
③東資子氏 (岩手民俗の会)「**一関市における民俗資料の公開―地域と民俗―**」
④岡山卓矢氏 (東北民俗の会)「**まちづくり行政と民俗的資料の活用について**」
⑤國井秀紀氏 (福島県民俗学会)「**民俗と考古からみた技の再発見**」
⑥盛永未来氏 (山形県民俗研究協議会)「**限界集落に伝承されるシシ踊り―米沢市綱木獅子踊りを事例に―**」

増田氏は青森県立郷土館で開催された企画展「昭和家電パラダイス」での経験を通じ、家電やそれを使用していた昭和中期以降の暮らしを博物館がどう扱うか、またその際の問題について報告した。戦後の家電は歴史的価値が認識されづらく、加えて道具の進歩が早くなったことで使い捨ての傾向が強まったことから、収集が容易ではないことを指摘。さらに、工業製品という地域性のない資料を扱うにあたっては、それらを利用した生活者の証言が資料の価値を左右する一層重要な要素になるとの見解を示した。

國井氏の発表のようす

鎌田氏は無形民俗文化財の活用の一例として、男鹿市観光協会が実施する「ナマハゲ伝道師認定試験」について紹介した。伝道師認定試験の受験者は男鹿市よりもむしろ全国に及んでおり、こうした取り組みがナマハゲ行事の活性化に寄与する面は大きいのではないかという期待を示した。また、ナマハゲの着装具を例に、行事を通じて民具を体感し知ることが資料の新たな活用方法につながるのではないかと述べた。

東氏は地域に貢献する資料館という理念のもと、新たな民俗資料館の開設に向けた取り組みを紹介した。地域の特徴を把握するための資料収集の方向性を示すとともに、地域との協働の実践として地元の高校生に鹿踊りの展示パネル監修を依頼するなどの試みを挙げた。その上で、地域の人にとっても日常生活から離れた民具に触れることは新たな発見であり、同じ目線で共に学びながら資料の利活用の方法を探っていくという展望を述べた。

岡山氏は地域住民による文化的資源の新しい活用活動について報告した。宮城県柴田町における「しばた 100 選」は町民主体の中で観光や地域振興に主軸が置かれ、従来の文化財行政や博物館とは異なるセクションとともに活動が行われている点を指摘した。そこには住民のニーズと文化財行政との意識のズレがあり、こうした文化的な価値を有する資料の活用をめぐる新しい展開が生まれるなかで、両者の溝を埋める方策を考えなければならないのではないかと提言した。

当学会の國井氏は、自身が箕づくりを行う中で気づいた技術の保存・活用方法について報告した。民俗技術は映像記録によって保存されることが多いが、それを参考に自らの手で繰り返し製作することで、製作者の視点を獲得し、映像に残されたこと以上のことが理解できるようになると主張した。また、その過程で資料を詳細に理解するためのモノを見る目を育むことができると述べ

た。それはより実用的な映像記録製作にフィードバックされるものであり、技術の保存と新たな活用につながるものだと訴えた。

盛永氏は地域が限界集落化する中で綱木獅子踊りがどのように伝承されてきたかを紹介するとともに、今後の継承に向けての課題と可能性について考察した。綱木獅子踊りの存続にあたっては、継承者の条件を変更して広く門戸を開いたことが大きいと指摘した。また、そこには保存会とは別に、宣伝活動を含む様々な側面から支援を行う「綱木獅子踊りを考える会」が存在したことが大きいと指摘する。民俗芸能が地域のコミュニティをつないでその輪を広げていくためには、こうした団体をどのように組織化し運営していくかが重要であると説いた。

会場からは、資料活用のためのネットワークや支援団体の必要性、映像記録の作成や効果的な利用法に関する活発な意見が出された。今回の合同研究会では、様々な立場の発表者が多様な活用の形を模索している状況が明らかになった。設定されたテーマは一筋縄ではいかないものだったが、各発表と討論を通じて多くの可能性を感じられる刺激的な研究会であった。

また会場となった人文社会科学部棟の１階では、この日１日限定のミニ展示「小川原湖民俗博物館旧蔵資料の保存と探求―弘前大学民俗学研究室の取り組み―」が開催されていたほか、学内の弘前大学資料館では弘前大学人文社会科学部×国立歴史民俗博物館共同企画「被災地と向き合う－文化財レスキューの取り組み－」も開催中だった。弘前大学は地域に密着した大学として、災害や私設博物館の閉館等により滅失の危機に瀕した貴重な歴史的・民俗的資料のレスキューにも積極的に取り組んでいる。（事務局　山口　拡）

ミニ展示「小川原湖民俗博物館旧蔵資料の保存と探求」

研究会報告　地域持ち回り研究会

平成29年10月21日(土)、「伊達の養蚕文化をまなぶ」をテーマに地域持ち回り研究会（中通り）が伊達市内で開催された。当日は時折雨の降るあいにくの天気だったが、会員を中心に約20人の参加者があり、「奥州蚕種本場」として栄えた伊達地方の養蚕業について知る一日となった。まず10時より梁川中央交流館で山田将之氏（伊達市教育委員会）の「伊達市に残る養蚕と最近の取り組み」と題するご講演があり、伊達市域と養蚕の関わり、その歴史と現状についてご教示いただいた。

五十沢熊野神社での見学のようす

講演終了後は市内各地の養蚕関連資料の見学を行った。最初の見学地は五十沢（いさざわ）地区で、現在はあんぽ柿の生産で知られるが、もとは養蚕が大変に盛んな地域だったという。五十沢熊野神社では多くの地域住民の方々が集まって下さり、「糸取りの図」絵馬（市指定文化財）を拝見しながら、絵馬や当地の養蚕業についてお年寄りのお話を直接伺うという貴重な機会に恵まれた。またかつて２月の養蚕の予祝儀礼で供えたという「繭だんご」でのもてなしもあった。

続く産業伝承館では昼食を待つ間、2階の養蚕展示「伊達の養蚕とひとびとの暮らし」を見学した。こちらは観光客向けの展示として、手作りだというジオラマや人形を多用し、小さいながらも分かりやすい展示だった。

昼食後には泉原養蚕整理室・展示室へと向かった。ここでは国の登録有形民俗文化財である「伊達地方の養蚕関連用具」が保管され、現在もさらなる活用へと向けた地道な整理作業が継続されている。整理された資料台帳や資料の保管状況について、山田氏の案内でつぶさに見学することができ、筆者自身、資料の整理の上で参考と

旧阿部製絲株式会社石蔵での見学のようす

notesから　シルクロード・ネットワーク・ふくしまフォーラム2017　全国大会の開催

福島市教育委員会では、数年前から信達地方の養蚕および絹文化についての文化財調査に取り組んでいる。福島市とその周囲は、幕末から明治・大正・昭和初期にかけて、生糸生産の隆盛期であった。とくに明治初期には、岩代が生糸輸出量全国一になり日本の輸出産業の一翼を担った。信達（伊達郡・信夫郡）地域における養蚕および製糸業の繁栄の軌跡は、地域の生活の歴史の中に色濃く残っている。しかしこの地方の発展の原動力となった養蚕や絹の文化について、時間の経過とともに希薄になりつつある。

最近、各地で地域づくりの一環として見直され、絹に関する様々な活動が行われている。福島市は、その生活文化を掘り起こし、いわゆる絹の民俗についての調査を行っている。

このような中で、去る平成29年7月8日・9日福島市において、公益社団法人横浜歴史資産調査会、ＮＰＯ法人街・建築・文化再生集団、シルクロード・ネットワーク・ふくしまフォーラム実行委員会の主催で「シルクロード・ネットワーク・ふくしまフォーラム2017　シルクロードでつなぐ街と人　信達地方　絹文化をいかしたまちづくり」と題しての全国大会が福島市のコラッセふくしまで開催され、県内外から150名が参加した。

初日は、信達地方絹遺産見学会として福島市民家園、飯野町養蚕農家、かわまたおりもの展示館、福島新町教会等を見学した。福島市飯野町では現在5軒の養蚕農家があり、大久保地区の養蚕農家を見学、民家園では東北で一か所の蚕種業家との座談会などが行われた。その後交流会が行われ、翌9日には基調講演として、国土交通省・脇坂隆一氏「シルクの文化を活かした地域づくり」、高崎経済大学特命教授・佐滝剛弘氏「絹産業資産を核とした広域地域連携の取り組み」、福島県史学会長・村川友彦「信達地方の養蚕、製糸、絹織業の特色について」などが行われた。午後は養蚕、絹文化に係る歴史や遺産、これを活かす広域連携の可能性を探ることをテーマに、全国の取り組みの事例報告が行われた。

シルクロード・ネットワーク・ふくしまフォーラム2017

広域連携の可能性を探る目的から、全国各地の取組の事例報告が行われ、福島の取組紹介の一つとして「信達地方の手織りの継承への取組」について福島市「民家園手織りの会」の報告があった。この会では、明治期に概ね姿を消した弓棚式のタカバタ（織機）による手織り技術の復元に取り組んでおり、聞き取りをもとに平成25年頃から、その技術継承活動を行っている。

現在福島市では、福島市周辺の手織りによる織機やその関連道具、「手前織り」といわれた家庭織りの着物調査を実施し、絹に関わる民俗文化財調査の取組みを実施している。（会員　村川友彦）

なる点も多かった。

最後の見学地は旧阿部製絲株式会社石蔵である。繭の貯蔵庫として昭和35年に建設されたこの蔵は、かつての養蚕業全盛期の名残を伝える市内でも数少ない建造物となっている。所有者である阿部氏のご厚意で内部も見学させていただいたが、繭や社名の入った繭袋のほか、当時の設備などが一部残され、かつてこの蔵を繭が満たしていた頃のおもかげを感じることができた。

なお五十沢地区では新聞社の取材もあり、その後、本研究会の様子が新聞記事として掲載された（『福島民友』10月23日）。盛りだくさんの日程ではあったが、今回は地域の方々との交流の機会も多く、大変有意義な研究会となった。これもひとえに、ご多忙の中を見学先の提案や現地調整の労をとって下さった山田将之様、そして我々の見学を快諾され、親切にご対応下さった引地理恵様はじめ五十沢地区の皆様・阿部善武様（阿部製絲）のおかげであり、この場を借りて関係各位の皆様に心からの感謝を申し上げたい。（事務局　大里正樹）

展示見学記　三春町歴史民俗資料館　特別展「絵馬―社寺に残る三春の記憶―」

平成29年10月14日（土）～11月26日（日）を会期として、三春町歴史民俗資料館で絵馬の特別展が開催された。同町では昭和55年に行った絵馬の悉皆調査をもとに刊行された報告書『みはるの絵馬』があり、1,000点を超える絵馬が報告されている。また歴史民俗資料館では絵馬に関する展覧会を過去に2度開催しているという。今回の特別展は旧三春城下の社寺を中心とした再調査の成果であり、対象となった400点以上にのぼる絵馬のうち61点が展示された。

展示構成は、Ⅰ馬絵、Ⅱ殿様の奉納絵馬、Ⅲ様々な絵馬の大きく3つに分けられ、Ⅲは参詣図や人物、花鳥など7つに分類整理されて紹介されたが、中でも目を引いたのは2～3ｍにもなる巨大な絵馬の数々と、最初のコーナーに紹介された多くの馬絵である。三春は全国有数の馬産地であり、馬の健康などを祈って奉納された多くの馬絵がみられる。特に馬描きの名手として高い評価

を受け、三代に渡って画号「研山」を名乗った徳田家は代表的な絵師の家系である。その初代・徳田好時は近世後期に三春藩の駒奉行まで務めるほど馬術を得意とした人であったが、画業にも親しみ多くの馬絵を残している。その他にも中村寛亭や高倉旭城など、近世・近代の三春を代表する絵師たちによる絵馬作品が紹介された。

また特別展に合わせて刊行された図録は報告書としても位置づけられており、展示されなかった絵馬も含めて447点が一覧にまとめられている。ほとんどの絵馬は写真も掲載され、奉納年代や主題、絵師や奉納者に関する全体的な傾向についての解説も掲載されている。展覧会の開催や図録の刊行には並々ならぬ調査の蓄積があったと想像されるし、また過去の展示や報告書を含めて地域の絵馬がこれだけまとまった形で報告されている例は他にない。図録も必読の一冊である。（事務局　内山大介）

展示会のチラシ

コラム Column　未来へ伝える海辺の食文化
～特別展での郷土料理展示から～

南相馬市博物館では平成29年9月2日～10月22日まで特別展「被災地の海を生きる—わたしたちの海　未来につなげる蒼い海—」を開催した。震災と原発事故から6年、南相馬市や相双地域の海とその周辺環境、海辺の生物の状況はもちろん、海とともに受け継がれてきた祭事や郷土料理、漁師の生活等についても紹介した。44日間の開催期間であったが、当館で最も来館者数の多い相馬野馬追関連の特別展に匹敵する来館者数となり、震災後の海について人々の関心の高さが窺えた。

本展示は主担当学芸員の専門が自然分野のためメインの展示内容は自然であったが、海と人々の暮らしは切り離せないとの考えから民俗分野にまで及ぶ幅広いテーマ構成となった。

郷土料理の紹介では、海の恵みを使った料理や海辺に伝わる料理計13点を食品レプリカにして展示した。これらの料理は元漁師の奥様の協力を得て実際に作り、それらを型取りしてレプリカを作製。精巧な出来栄えが来館者から好評で、「分かりやすい」、「知っているようで知らなかった」、「懐かしい」等の感想をいただいた。またレプリカ展示は一部の料理に限られるため、レプリカ製作と同じ方の協力のもとレシピを作成し、来館者が自由に閲覧出来るよう設置した（※希望者へは配布も行い、当館HPでも公開）。

震災後、避難等による共同体の崩壊や材料入手の困難さ等により、相双地域の人々はこれまで親しみ食して来た料理を作ること、食べることと疎遠になりつつある。

「食」は誰しも関心のある最も身近な文化であろう。とくに郷土料理は、その地で生きた先人たちがその地の風土に合うよう生み出した知恵と工夫の蓄積、歴史である。しかし、身近な存在のあまり食文化の重要性に気付かず、光が当たりにくいと感じる。今回の展示では、来館者の郷土料理への関心が予想以上に高かったことから、地域に根付く食文化を記録し伝承していく必要性を再認識するとともに、それらを一般に公開する重要性を感じる機会にもなった。（会員　川崎悠）

郷土料理（レプリカ）の展示のようす

つぶや記

▼今年度3回目の『ふぉーらむ・F』です。▼これでやっと定期刊行の流れに追いつきました。▼今後は夏と冬の年2回、会の活動を親しみやすく発信していきたいと思います。▼今回は事務局のほかお二方にご寄稿いただきました。お礼申し上げます。▼情報提供、エッセイ、祭りの見学記録など、民俗に関わるものであればテーマは自由です。原稿は800～1,000字程度でお気軽に事務局までお寄せ下さい。▼自由な情報交換の場としても活用できれば幸いです。会員各位の積極的なご投稿お待ちします。（里）

福島県民俗学会通信誌『ふぉーらむ・F』第7号
2018（平成30）年2月9日発行
編集・発行　福島県民俗学会（会長 佐々木長生）
福島県会津若松市城東町1-25　福島県立博物館内
事務局：内山大介・大里正樹・山口拡
編集担当：大里正樹